
傀儡の一生

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡の一生

【Nコード】

N9165M

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

これはとある世界のとある一幕

ハジマリ（前書き）

一通り読み直しましたが誤字脱字があるかもしれません。
作者は素人です。

ハジマリ

その世界には、魔族がいて、人間がいて、互いに争っていた。

魔族と呼ばれている者達と人間の違いといえば、魔族たちは皆赤い瞳で、個人差はあるものの人間よりは魔力があつた（魔力比3：1）事である。（要はたいした違いはなく、身体的には瞳以外皆無。）

人間に王がいるように魔族にも王がいた。俗に言う『魔王』である。『魔王』といつてもピンからキリまでいて、歴代最強と言われた者でも人間1000人を犠牲にすれば勝ちが約束される程度であつた。

人間に力を貸していた『神』がいなくなり早1000年。人間も魔族も世代交代を重ねること三順目。今から20年ほど前に現在の『魔王』は即位した。

そして今に至るまで20年ほどで、魔族対人間の人口比率を1：1から100：1にまでしてしまった。

絶大な力を貸していた『神』がいなくなり、一時期混乱したが80年も経ち、以前のように魔族と互角かそれ以上の戦いを繰り広げるようになった人間を、である。

魔族の国においては

「この王がおられる限り我らは安泰だ。」

と、言われていた。

人間の国においては

「あの『魔王』がいる限りいつ我らが滅んでも可笑しくはない。」

と、言われ、

「早く寝ないと『魔王』がやってきて食べられちゃうよ。」

と、子供を寝かしつける際の脅し文句にも使われていた。

話は変わるがここで先程少し触れた『神』について説明しよう。

この世界の『神』の成分は人間の想念である。（要は信仰）

そのため『神』の力や存在は人間に依存していて、『神』も自分の存在の基盤たる人間の増減については敏感である。

そして、100年の間不在であった『神』がこの世界に再び現れた。『神』はまず、自分のいない間に人間が絶滅寸前まで追いやられていたことにその生涯初の恐怖を覚えた。

恐怖に駆られた『神』はその力で世界を見て、元凶たる『魔王』を発見し、抹殺するため全力で『魔王』を攻撃した。

『魔王』のいる場所が閃光と爆炎に満ちた。

「とうとう現れたか、『神』」

しかし、炎の中から無傷で現れた『魔王』は遠視をしている『神』の視線にしっかりと自分の視線を合わせて、唸るようにしかし、はつきりとそこに威厳が感じられる声で言った。

『神』はより恐怖を深め再び全力で攻撃した。

しかし、『魔王』は再び無傷で現れた。

『神』は何度も、何度も己のほぼ全存在をかけ攻撃した。

何度も、何度も『魔王』は無傷で『神』の視界に現れ、同じことを10ほど繰り返し返したあたりで、先程と同じように、しかし、何倍も恐ろしげに言った。

「我が一族が長きに渡るこの争いにおいて、貴様から直接攻撃されることを想定して居ないでも思ったか。我や我が血族には貴様からの直接干涉の一切を受け付けない術が施してある。理解したのなら速やかに住処に帰り大人しくしているがいい。」

『神』は遠視を止め、考えた。

奴を消さなければ危うい。しかしこちらからの干涉は効かない。どうすればいいのか。

1ヶ月後『神』はやっと答えにたどり着いた。（いろいろと考えすぎた）

すなわち、『直接干涉』が効かないなら間接的に行えばいい。

3年後『神』は蓄えた力を使い1人のヒトを造った。

ヒトは16、7くらいの少年だった。

『彼』の瞳はどこまでも澄んでいた。

『彼』は刷り込まれたこと以外の何事も知らなかった。

刷り込まれたのは、

『魔王』を何が何でも仕留めること、

途中で会った人間は1人残らず助けること、

造物主は絶対

最低限の知識（一般常識以下）

であつた。

『彼』は刷り込まれたとおり人間を1人残らず助けて行つた。

『彼』は行く手を阻む魔族を何故か殺さずしかし1人残らず完膚なきまでに倒していった。

やがて、『彼』は『魔王』の元にたどり着いた。
そして、『魔王』に挑み、『魔王』は受けて立った。

『魔王』と『彼』の闘いは熾烈を極めた。

互いにボロボロになり決着が見えてきたころ、『魔王』が『彼』に聞いた

「何故お前は悲しんでいるのだ？」

「・・・」

「・・・答えないか、まあいい、次で決着が着くだろう。」

『魔王』がとどめの構えを取ると『彼』が同じように構えながらボツリ、とどこか虚ろな風に言った。

「なぜぼくがしなければいけないの？・・・かみさま。」

『魔王』はそれを聞きすべてを悟り、『神』に対する思いつく限りの罵詈雑言が心の内で駆け巡った。

憤怒と哀憫の表情を浮かべながら『彼』に言った。

「せめて死ぬ前にお前に知識と一般常識を授けよう・・・あったかもしれない、その悲しみを覆うほどの楽しさ、嬉しさ、幸せを走馬灯の中でもいいから感じ取れるように。」

そう言うと『彼』に指を振りかけた。

『彼』はピクと一瞬身体を震わせた。

・・・そのとき2人の間に1人のヒトが突如現れた。

と、そのヒトは爆発した！！

突然のことに2人とも反応できず深手を負い、互いにこのままでは死ぬことを悟った。

闘う前ならいざ知らず、既に気力で立っている2人には爆発を避ける余力がなかったのだ。

『魔王』は爆発する寸前のそのヒトの瞳を見た。

その瞳には意思がなく、奥で『神』が晒っていた。

「おのれ！『神』！！」

『魔王』はありとあらゆる怒りを込めて叫んだ。

「・・・やっぱりね神様・・・いや、」

爆発から3日後世界に『魔王』の死の情報が巡り、
同時に『神』の帰還が布告された。

人間は忌まわしき『魔王』の死に狂喜し、『神』の帰還を喜び歓迎し、『神』より伝えられた『魔王』と相打ちになった『使い』に感謝と尊敬の念を捧げた。

魔族は彼の王の死を信じられず呆然とし、事実を巡って小規模な内紛が起きた。

その隙を人間と『神』が見逃すわけもなく、戦いの形勢は逆転し、2年後、魔族は辺境の地へと追いやられた。

しかし、神すらも知らない。

あの時、あの場所に、もう1人ヒトがいたことを。

そのコトによって大きく変わった未来を。

「絶対にこのまま思い通りにはさせない」

と、誰かが何処かで言った。

「うん。絶対に」

と、誰かがソレに応えた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
?

ハジマリ（後書き）

このような雑文を最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9165m/>

傀儡の一生

2010年12月2日08時14分発行